

野外教育者にとっての Significant Life Experiences(SLE)の 意味づけに関する研究

水津 真委 (スポーツ学研究科 生涯スポーツ系 野外スポーツ分野)

主査 豊田 則成 副査 金森 雅夫・林 綾子 (担当指導教員)

A study about the meanings of Significant Life Experiences(SLE)
for the outdoor educators

Mai Suizu

キーワード：野外教育者 野外体験 Significant Life Experiences(SLE) 意味づけ

Keyword : outdoor educator outdoor experience Significant Life Experiences(SLE) meaning

1. はじめに

これまでに、野外教育の効果として「自己」「他者」そして「自然」との関係向上の3領域が実証されてきた。特に「自己」との関係においては、自己概念や自己効力感など、野外教育プログラムの効果として多くの研究にて証明されている。しかし、野外体験自体の意味について十分に研究が行われていない。

これまでに環境教育の分野では、アメリカを中心に環境活動家の「環境に責任のある行動」の形成要因を探る研究として、Significant Life Experiences(以下 SLE と示す)と呼ばれる「過去をふりかえる」手法で、個人の環境に関する態度や行動との関係性を明らかにする取り組みがなされている(Tanner, 1980)。

そこで本研究では、この手法に着目し、野外教育者が SLE をどのように意味づけしているのかを追求する。今日、野外教育現場では指導者のバーンアウト問題への対処や専門性の質の向上が求められており、指導者養成が課題となっている。本研究の結果が野外教育分野の発展に寄与することを期待する。

2. 研究方法・結果

本研究は、「野外教育者は SLE をどのように意味づけしているのか」というリサーチクエスチョン (Research Question : 以下, RQ とする。)を設定し、混合研究法の手法を用いて展開した。第1段階では野外 SLE の構造を明らかにすることを目的にアンケート調査を行い、第2段階では、野外 SLE の意味づけについてより理解を深めることを目的とし、半構造化インタビューを採用しデータ収集を行った。

1) 第1段階

①手続き・調査時期：2014年2月下旬から5月末にかけて Web 上(Survey Monkey 社：URL)でのアンケート調査を行った。

②対象者：有意サンプリング (Purposeful sampling) を行い、野外教育者あるいは、野外教育指導経験のある人に調査依頼をし、185名の回答を回収した。

③調査内容：対象者の属性をはじめ、主に、「自分自身に最も強く影響している重要な体験 (SLE)」を最大3体験まで聞き出し、体験の時期・体験の内容・選択した理由、そして自分自身に与えた影響といった詳細の自由記述回答欄を設けた。

④結果：185名中、有効な回答者152名(有効回答率82.2%、男115名、女37名、平均年

齢38.3歳)の回答を内容分析(K.クリッペンドルフら, 2006)とKJ法(川喜田, 1970)を参考に分析を行ったところ、401ケース中、(i)野外 SLE の時期は、青年期164ケース(41%)、成人期105ケース(26%)、児童期97ケース(24%)といった順で回答が得られた。青年期は、アイデンティティを模索したり、親子や友人との関係に変化が現れるなど、自己の確立には必要不可欠な時期である。(ii)野外 SLE の種類として、「自然体験活動」、「野外教育プログラム参加者体験」、「野外教育プログラム指導者体験」の3つの分類が得られた。また、(iii)野外 SLE の意味づけの5カテゴリと12のサブカテゴリが得られた(図1)。

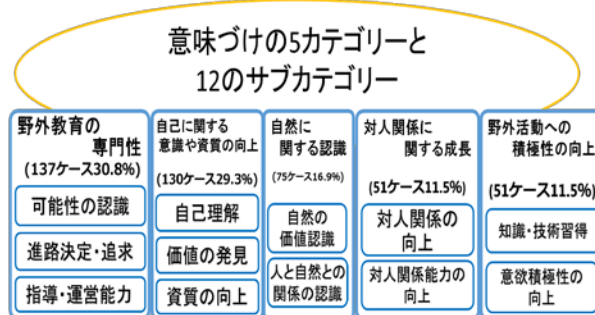


図1：野外 SLE の意味づけ

また、「説明のつかない自己への影響」といったどのカテゴリにも属さない回答を「原体験」と捉えることとした。さらに、野外 SLE の時期・種類と野外 SLE の意味づけの間には、その出現率から特徴的な関係がみられた(図2)。

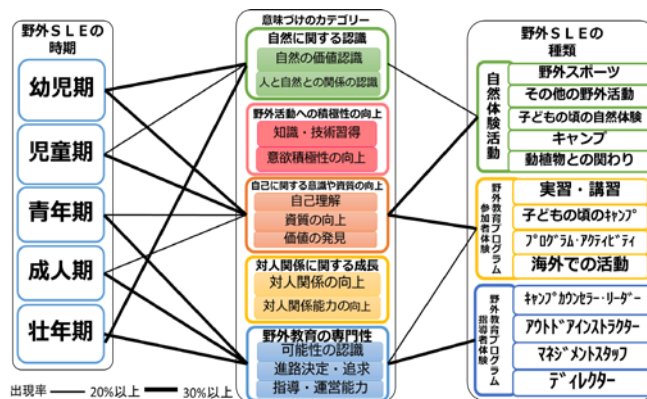


図2：野外 SLE の時期・種類と意味づけの関係

2) 第2段階

①調査方法：アンケート調査時にインタビュー調査への協力があつた回答者に依頼をし、2014年7月から9月末にかけて、約1時間～2時間の半構造化インタビュー調査を行った。有意サンプリング法にて、野外活動の経験や指導の経験が豊富な人や現在の野外教育指導者に依頼し、その中からさらに同意のあつた8名（男性6名、女性2名、平均年齢52.4歳、平均指導年数26.4年）にインタビュー調査を実施した。

②調査内容：アンケート調査によって得られた項目に沿って、具体的に語ってもらえるよう、半構造化インタビューを展開した。

③分析方法：インタビューで得られた「語り」をデータとして、グラウンデッド・セオリーアプローチ（GTA）の方法を用いた。【データ収集】→【テキスト化】→【切片化】→【コード化】→【カテゴリー化】→【ストーリー・ライン】→【理論記述】の手順で分析を進めた。

④結果：8名のインタビュー調査の結果、ストーリー・ラインから理論記述を行い、そこから以下の野外SLEの意味づけに関する知見が導き出された。

- (1) 「幼少期の自然体験は、原体験として後の価値形成の基盤となる」
- (2) 「非日常的な野外体験の価値を認識」
- (3) 「人と自然との関係を認識」
- (4) 「既成概念を覆されることから、新たな認識が生まれる」
- (5) 「野外は人が成長する場である」
- (6) 「野外教育専門家としての将来の方向付け」
- (7) 「体験の積み重ねによる、信念の構築」

4. 総合的解釈

アンケート調査から導き出した野外SLEの意味づけの5カテゴリーと12のサブカテゴリーは、インタビュー調査で導き出したストー

リー・ラインからの理論記述と全て一致していた。よって、意味づけのカテゴリーの妥当性が支持されたといえる。さらにアンケート調査では、十分に捉えることができなかった影響の一つであつた“原体験”は、インタビュー調査によって、その意味づけが自分自身の価値形成の基盤となることが示唆された。

また、野外SLEの意味づけは成長段階との関連がみられ、野外SLEの段階的な展開が示唆された（図3）。

野外教育者のSLEについて、幼少期の原体験から得られた自然に関する認識はその後の価値形成の基盤となっていることから「基礎的SLE」と捉えられ、その後の青年期以降に自己に関する意味づけにつながるSLEを「発展的SLE」と区分した。そして、さらに自己の成長を通して、将来を方向づけるような野外教育の専門性に影響のある「専門的SLE」として段階的に展開されたことが示唆された。また、野外SLEの意味づけが積み重なることによって、自己の信念の構築につながるということが示唆された。

5. 結論

野外教育者は野外SLEを「その意味づけの段階的な積み重ねから、自己の信念を構築する要素である」と意味づけているという仮説が導き出された。今後の野外教育現場でのプログラミングや指導者養成に活かすためにも本研究で得られた仮説を検証する必要があると考えられる。

引用文献

- K. クリップペンドルフ：三上俊治ほか訳（2006）メッセージ分析の技法「内容分析」への招待。勁草書房：東京。
 川喜多二郎（2000）発想法。中央公論新社：東京。
 Tanner, T. (1980) Significant Life Experience
 A New Research Area in Environmental Education, Journal of Environmental Education, 11(4):20-24.

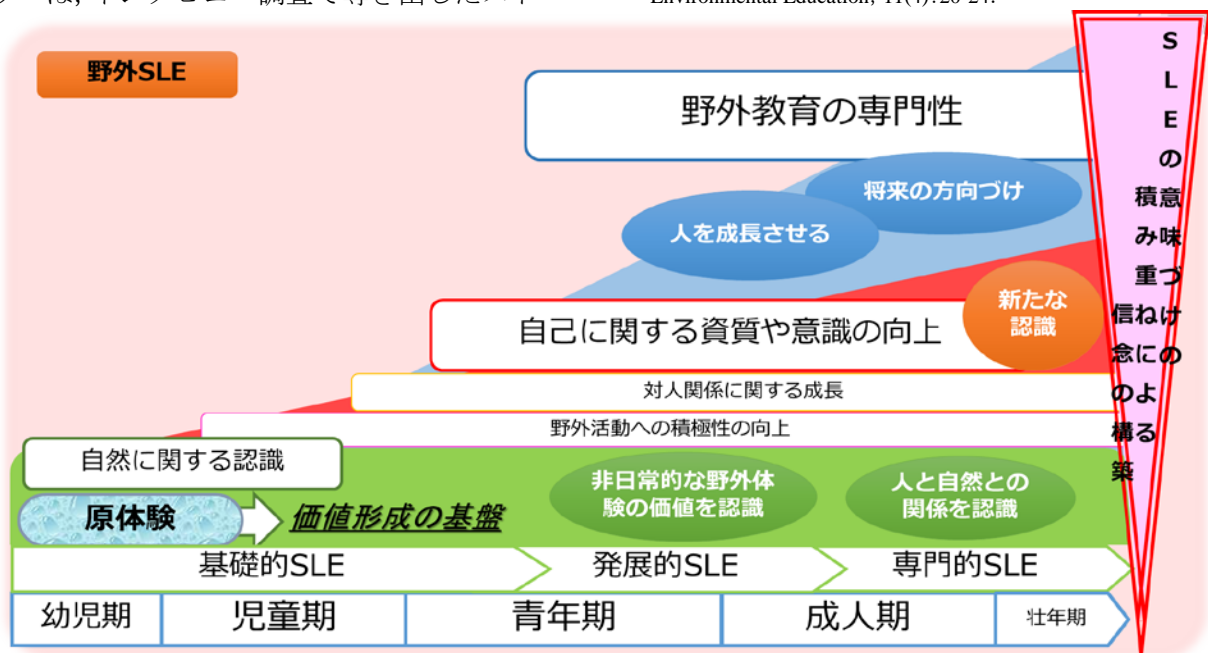


図3：野外SLEの意味づけの積み重ねによる信念構築